

ぷれっそ

2025
第67号

【ひろがれ、かसानれ、むさしののわ】



特集

ひろがれ、
かसानれ、
むさしののわ

広報紙「ぷれっそ」ができるまで

● えすぷれっそスペシャル

新人紹介 Q & A

● 笑門来福

防災の日に思いを寄せて

● むさし MONO

すばるの押し花

(生活リハビリサポートすばる清水栄良)

むさしののわ

“ひろがれ、かさなれ、むさしののわ”これは2015年に2色刷りからフルカラーにした時に、ぷれっそが目指すものとして検討したテーマです。この大きなテーマを具現化するために、編集委員会では毎回、何をどう伝えるか、話し合いを重ねています。私たちが大切にしていることや、当法人の取り組みを地域の方々に発信し、福祉をより身近に感じていただきたい気持ちで年3回発行しています。

今号では広報紙にギュッと込められた想いをさまざまな方向から振り返ります。

法人の見える化



「ぷれっそ」はどのように始まったのですか？

初代発行者の声



安藤真洋
(社会福祉法人武蔵野 前理事長)

広報紙の役割はさまざまにあります。そのひとつは関係者を含む読み手との信頼関係の醸成ではないでしょうか。法人は開設後、しばらく広報紙「笑顔」を発行していました。事業が障害者総合センターのみの時代、職員は真剣ではあったもののいささか内向きだった草創期に、相互の理解促進、そしてご利用者や関係者の皆さまに法人の活動状況をお届けするという広報紙でした。

その後、法人の事業はニーズに応える形で広がっていきますが、この時代、国は大きな制度改革を進めます。その社会福祉基礎構造改革では、住民参加による福祉文化の土壌の形成、情報公開などがあがっていました。私は勉強会などで全国各地の先進事例を知り、地域に根ざす法人の重要性、そして広報活動を強く意識するようになりました。

ぷれっそ発行の直接の契機になったのは、市からの指摘です。市は2007年に「武蔵野市福祉三団体の抜本的改革に関する基本方針」を定めました。その中に、「(社福)武蔵野に対しては「市民へのPRが不足している。事業の全体像が見えない」という指摘がありました。それまで各施設では積極的に広報紙を出していましたが、法人全体としてのものではありませんでした。

このような状況をふまえて、地域にある法人として広報紙発行の意義を共有し動き始めました。法人内でまず名称を公募し、編集は「七七舎」のサポートを得て、納得のいく紙面ができました。発行後に地域の方から、「法人のことが少しわかったよ」という声をいただき、励みになったことを憶えています。



Q 「ぷれっそ」を読んだ感想を聞かせてください。



ご利用者の声

Aさん

(企業就労しているグループホームのご利用者)

一般就労からワークセンターけやきの利用を開始したご利用者の記事を読んで、いくつになっても働ける場所があると知り、「絶対に企業就労じゃないといけないわけではない。こういうところもいいのかも」と思い、「また頑張ろう」という気持ちになりました。(ぷれっそ64号「いくつになっても働きたい!」を支援するの特集記事から)

あの時期は本人の体調が不安定だったこともあり、「こういう働き方もあるんだね」と力をもらいました。



Aさんのご家族

特集

ひろがれ、かさなれ、

広報紙「ぷれっそ」ができるまで

Q 「ぷれっそ」を読んだ感想を聞かせてください。

鮮やかな色合い

地域の声



酒井陽子さん

(NPO法人ペピータ ペピータくらぶ コーディネーター)

毎号、バラエティーに富んだ内容と全体の色合いが鮮やかで読むのが楽しいです。

特集は専門的な内容が多いですが、写真や図やイラストだけでも何となくわかるので、記事を担当されている方の知識とセンスはすごいなと感心しています。

「たて糸 よこ糸」は企業や市民活動団体の社会貢献活動を紹介されていますが、さまざまな職種で多くの会社や団体が地域の皆さまとつながっていることを知り、うれしく、幸せな気持ちになりながら読んでいます。

今回、「ぷれっそ」の感想を書くにあたり改めて読み返し、「ぷれっそ」の記事はすべて、サブタイトル【ひろがれ かさなれ むさしののわ】につながっているのではないかと思います。

どうでしょう？

わかりやすく伝えるために



「ぷれっそ」はどのように編集していますか？

制作会社の声



森祐子
(有限会社七七舎)

七七舎は、福祉や介護に特化した編集プロダクションで、ご縁があつてぷれっそ創刊時より編集のお手伝いをしています。ぷれっその編集委員を構成しているのは、現場で日々ご利用者と向き合っている法人武蔵野の職員の皆さんです。書籍編集などの経験はない皆さんですが、特集の企画立案から取材、原稿執筆や編集など、能動的な取り組みで毎号見事に8ページの紙面をまとめ上げていきます。

弊社は必ず編集会議に出席し、編集委員の皆さんが話し合った特集の意義や方向性をしっかり掴んだうえで、デザインやレイアウトをつくっていきます。毎回さまざまな特集が組まれますが、特に障害者福祉の分野ではこれまでよく知らなかった活動や制度を取り上げることが多く、大変勉強になっています。福祉分野の制度は複雑で難しいものが多いので、図表にしたり、イラストを活用するなどして、視覚的にわかりやすくまとめるよう心がけてきました。

最初は2色刷りの比較的簡素なデザインからスタートしたぷれっそですが、編集委員の皆さんの試行錯誤とノウハウの蓄積により、今ではフルカラーで凝ったデザインの特集が毎号紙面になっています。今後も法人武蔵野のさまざまな取り組みをわかりやすく発信できるように、大切に紙面をつくっていきたいと思っています。

できるまで

「ぷれっそ」に込めた想いが、
どのように形になるのか、
発行までの流れをご紹介します

編集会議①

ー特集や掲載テーマを検討ー



発行の
4か月前

Point
①

特集は事業紹介だけでなく、社会情勢や当法人の変化に伴う内容など、その時期にふさわしいテーマを取り上げます。福祉のことを知らない方にも私たちの事業や活動が伝わるよう、毎号伝え方を検討しています。

▲コーナーごとに1～2名の編集委員で分担します。

インタビュー&原稿依頼

Point
②

当法人に関わってくださっているたくさんの方のお話を伺うコーナー（たて糸よこ糸）があります。よりよい地域づくりを目指されている方の想いをインタビューしています。

進捗確認ーオンラインー

原稿メ切



発行の
2か月前

①各執筆者から担当者がデータ原稿を受取り、
メールで全編集委員や出版担当と共有します。

編集1回目ー初校ー

Point
③

出版担当がざっくりとした紙面の形にしたものを作成します。編集担当は読者がどのように感じるかをイメージしながら検討ができます。



みなさまの感想
お待ちしております！

presso@fuku-musashino.or.jp



ぷれっそへの感想をお聞かせください。

「こんな話を読みたい！」

など、どんなことでも お聞かせいただけますと嬉しいです。



「ぷれっそ」バックナンバー

2015年からのバックナンバーをご覧ください。
ぜひご活用ください。



図解

広報紙「ぶれっそ」が

①アンケートの感想から生まれたコーナーもあり、
読者（地域）と相互のつながりを大切にしています。

編集会議③
－振り返り－

Point
5

各事業所から意見や感想を集め、振り返りを行います。発行までの進め方の振り返りや、いただいた意見に基づいて次回以降の紙面に生かせるようにしています。



①ページ番号、号数、日付などに間違いはないか、写真はきれいに仕上がっているかなど、印刷に入る前に最終チェックを行います。

編集3回目－念校－

進捗確認－オンライン－

発行

年3回
5月、9月、1月

編集2回目－再校－

Point
4

初校で出た意見をもとに、出版担当者がもう一度紙面に修正を加え、全員で再確認します。また、誤字・脱字がないかのチェックも行います。

①より伝わりやすく、
より分かりやすい表現に。

この専門用語は
意味が分かり
にくいかも

編集会議②

文字量が多い
ですかねー

もっともっと ひろげたい、かさなりたい わたしたちのつながり

地域にはたくさんの広報紙があり、それぞれがさまざまな想いをもちて発行しています。

一生のうち、ほとんどの方が何らかのかたちで関わることになるであろう福祉。

その福祉の入り口を気軽にのぞいていただき、自分の身近にあると知ることによって安心につながっていただきたい。

私たち職員は、ぶれっ所に触れることにより、支援者として担うべき役割を再確認し、法人全体の使命を理解してよりよい支援や組織力を高めていくことにつなげていきたい。

このような想いを大切にして、私たちはぶれっそを発行しています。皆さんにとって身近な福祉の理解をすすめるための一助を重ねていくことで、誰もが住みやすい地域になるように努めてまいります。

それぞれの立場で福祉が重なり合い、つながり合っていく大切な手がかりとして、私たちはこれからも小さな発信を広げていきます。

えすぷれっす スペシャル

【質問項目】

- Q¹ 福祉職について理由はなんですか？
- Q² 入職してみてどのように感じましたか。
- Q³ どんな支援者になりたいですか？



みどりのこども館ウィズ 保育士
わたなべ ゆ み
渡部 裕美

→地図
P.8-A

- A¹ 会計職員として社会福祉法人に転職した際、現場の職員の方々が、一人ひとりのご利用者の支援をみんなで考え実践し、ご利用者の喜びをみんなで自分事のように共有しているのを見て、ここはなんて幸せな職場なのだろうというところから、福祉職を目指しました。
- A² これまで同様、児童分野での配属となりましたが、毎日覚えることがたくさんです！ そんな中でも、毎日かわいい子どもたちの表情、心が動く瞬間……。これから長い人生を歩んでいく、一人ひとりの人生の最初の土台づくりに微力ですが関わらせていただけることに感謝しています。
- A³ 一人ひとりがよりよく生きていくために、の視点をもち続けると同時に、支援する人も支援を受ける人もお互いに認め合える関係性を築ける存在でありたいと思っています。



みどりのこども館ハビット 作業療法士
こばやし ま き こ
小林 麻希子

→地図
P.8-B

- A¹ 作業療法士の多くは医療の視点で治療を提供しています。私もその視点を活かしていきたいと思いますが、障害のあるお子さんや保護者、その関係者がその人らしく生活していくことを大切にしている福祉職に興味をもちました。
- A² その人らしい生活とは一人ひとり違うと感じます。数十分のやりとりで、その人らしさを理解することとはとても難しいです。しかし、お子さんと遊ぶことや保護者の子育てについて、一緒に考えることやお手伝いできることはとても楽しいです。
- A³ 相談に来ていただいたお子さんや保護者が、安心して遊んだりお話していただけるような支援者になりたいです。対象となるそれぞれの方が思い描くその人らしい生活がより具体的になり、明日から生活を営んでいくことに少しでもお力になれたらうれしいです。

新人紹介 Q A

えすぶれっそのコーナーでは、心がほっと温まるスタッフの日常をお届けしています。今号のえすぶれっそスペシャルでは、今年度春に加わったスタッフの中から、分野も経歴もそれぞれの4名の声をお届けします。



わくらす武蔵野 社会福祉士
たき あゆむ
滝 歩

→地図
P.8-C

A¹ 高校生の頃に悩みを抱えていた時期があり、そのときに家族や友人、塾の先生など多くの人に支えていただいた経験から、私も相手に寄り添うことができる人になりたいと思ったからです。また、母が長年福祉の仕事に携わっており身近に感じていたことも理由の一つです。

A² 職員の方の、ご利用者に対する声かけや対応が優しく丁寧なことや、ご利用者ごとの居室が確保されておりプライバシーの配慮がされていることなど、入職してわずかですが施設に多くの魅力を感じています。支援者として、ご利用者の笑顔を直接見ることができるのもうれしく思っています。

A³ ご利用者について支援が必要な面だけではなく、ストレングス視点^{*}からも理解することを通して、ご利用者一人ひとりに合った支援や関わりを実践できる支援者になりたいです。さらに、ご利用者の自分らしい生活の尊重につなげられるように努力していきたいです。

※ご本人がもっている強みや長所、意欲に着目することを指します。



ゆとりえ在宅介護・地域包括支援センター 社会福祉士
おおたか かずのり
大高 千範

→地図
P.8-D

A¹ 公務員の親の影響もあり「地域の人役に立つ」仕事を志し、大学で福祉を学んだ後、他の法人にて長年、高齢の方々の相談に関わってきました。一時期法人の事務職を兼務する形で専門職から少し離れていましたが、改めて高齢・障害の、地域に住まわれている「人々」により近い現場を学びたいと考え転職するに至りました。

A² 一度経験を重ねた高齢者福祉の分野ですが、業務内容をはじめ立ち位置や必要な知識が大きく異なり、学ぶことが数多くあります。その分刺激のある日々を送ることができています。入職後2か月弱が経ち、未だ不慣れなことも多々ありますが、「簡単には答えが出ない」さまざまな問題を一緒に考えてもらえる諸先輩方に囲まれながら、いち早く必要とされる役割を担うことができるよう努めたいと思います。

A³ 目指しているのは、地域に暮らす中で起こりうるさまざまな問題・課題に対し、一緒に悩み考えることができる「伴走者」です。チームワーク（多職種連携）の強みを最大限に活かし地域を支えることができる、多様な暮らしのニーズを汲み取りその人に合ったサービスや資源を横断的につなぐことができる、そのような「住み続けたいを一緒に叶えられる」支援の一翼を担うことができればと考えています。

笑門来福

防災の日に思いを寄せて

防災の日は、1960年（昭和35年）6月1日の閣議で、9月1日を防災の日とすることが了解されたことに始まります。

この日付は、1923年に関東大震災が発生した日であるとともに、台風の襲来が多いとされる「二百十日」の時期にあたり、地震や風水害等に対する心構えを育成するために創設されました。

常日頃から注意を怠らず、災害への備えを整えておくべきとの啓発を目的として、現在では防災の日を含む一週間の防災週間と定め、全国各地で防災訓練や普及イベントが開催されています。

法人も毎年、ご利用者の避難訓練を行うほか、事業所ごとに事業継続計画（BCP 自然災害編・感染症編）を策定し、発災時の初動から事業再開までの対応手順を定めています。また、関係機関や地域の皆さまとともに、武蔵野市が行っている総合防災訓練に参加するなど、危機管理意識の醸成に努めています。

さて、施設の適切な維持管理においては、特別養護老人ホームゆとりえが電気設備更新工事に着手しました。来年度は障害者総合センター外部改修等工事に取りかかる予定です。日々の支援を支える環境を計画的に整備してまいります。今年も10月にあつたかまつり、11月に実践発表会を開催いたします。多くの皆さまにご来場いただき、法人の活動を知っていただくきっかけになれば幸いです。

（理事長 渡邊 昭浩）



すばるの押し花

法人内で生み出される「もの」とその「もの」がたり

→地図 P.8-E

生活リハビリサポートすばるの生活介護では、押し花で作品づくりを行っています。

押し花作品は、まず材料づくりから始まります。ご利用者と一緒に押し花用の花を育て、障害者福祉センターの敷地内に自生している四季折々の草花を摘みます。集めた花を丁寧に一枚一枚台紙に並べて、数日かけて押し花にしていきます。自分たちで押した草花や講師持参の押し花を使って、一筆箋やキーホルダーなどの作品を作ります。材料や素材は同じでもご利用者それぞれのつくり方があり、個性が光る作品に仕上がります。また全員で協力して、一つの作品をつくり上げることもありました。代表例はなんといっても、一番の売れ筋商品である押し花カレンダー。ご利用者の皆さんで何月は何の花を使うかなどを話し合っており、つくり上げています。また、地域の喫茶店で行っている講師主催の押し花展にも、額に入れた大きな合同作品を出展してもらっています。話し合っただけの形にしていくことは大変なのですが、その分完成した時の充実感や達成感につながっているのではないのでしょうか。



合同作品の作成風景

これからも押し花作品づくりを通じて、すばるの生活介護のご利用者の皆さんの表現が、地域社会に広がるように取り組んでいきます。

（生活リハビリサポートすばる 清水 栄良）

社会福祉法人 武蔵野 案内図

各施設は、

- 児童サービス
- 障害者サービス
- 高齢者サービス

に色・書体分けしています。また、A～Eは本誌に記事を掲載している施設です。

武蔵野市桜堤ケアハウス
軽費老人ホーム
在宅介護・地域包括支援センター
放課後等デイサービスパレット
ハビットサテライト

武蔵野市障害者福祉センター
B すばる
ほくと（ゆいっと）

武蔵野市立みどりのこども館
A ウィズ B ハビット
おもちゃのぐりりん

武蔵野市役所
さくらごほん
カフェ・ル・ブレ

わくらす武蔵野
なごみの家

武蔵野障害者総合センター
ワークセンターけやき
ワークセンター大地
デイセンター山びこ
デイセンターふれあい
地域生活支援センタービーと
パールブーケ

かしの木

せきまえハウス

北町ほっと館
きたまちハウス
りぶる

武蔵野福祉作業所
やさい食堂七福

ゆとりえ
特別養護老人ホーム
デイサービスセンター
在宅介護・地域包括支援センター

くすの木
あいる

ワークセンターけやき
（西久保オフィス）

ジョブアシストいんくる

